2023/11/15　　聖書研究会

聖書個所：コリントの信徒への手紙一 1 章 26～31 節

〇この世は愚かであって自分たちだけが真の知恵と知識の所有者であると誇ったパウロの論敵たち。彼らの影響により、コリント教会の内部には様々な不和が生じていた。「わたしはパウロに」、「わたしはアポロに」、「わたしはケファに」、「わたしはキリストに」と、実際はパウロやアポロ、ペトロ、キリストのこと、その思想などをきちんと正しく理解できてはいない、誤解、曲解しているのに、自分はこうした人々のこと、またその思想などに関わる知恵、知識を有していると誇りにして「自分たちが正しい。あなたたちが間違っている」と仲たがいしている状況があったわけである。

・しかしパウロは前回の聖書個所（1：18～25）で、そうした人間の知恵や誇りがいかに小賢しく、虚しいものかを強調する。他でもない神様が「世の知恵を愚かなものにされた」と言うのである。神様はこの世の知恵に取って代わる神様の知恵をお示しになった。それが、人々には愚かと映る十字架の宣教に他ならない。十字架の宣教は人々には愚かと映るものだが、しかしこれが実は神様の知恵であって、この神様の知恵が小賢しいこの世の知恵を無効化し、これに取って代わる、そしてこれを受け入れる人々を救いに導く。パウロは前回の聖書個所でそう主張し、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」と結論付ける。人智をはるかに超えた神様の知恵を前にしては、パウロの論敵たち、またコリント教会内部で裁き合っている人々の人間の知恵など取るに足りないものであり、ましてそれを誇りにするなど、そして人々を裁いて仲たがいを生み出すなど言語道断であるとパウロは言いたいのであろう。

・今回の聖書個所（1：26～31）では、コリント教会の人々に「兄弟たち」と呼びかけ、教会を形作った時のことを思い出させて、「だれ一人、神の前で誇ることがないように」、「誇る者は主を誇れ」という呼びかけが為される。そのようにして人々が謙虚になり、ただ栄光と賛美を神様に帰すところから教会内の不和を解消していくことがパウロの狙いであった。

【注解】

○「兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。」(26 節)

・「人間的に見て」＝㊀「カタ・サルカ」(直訳は「肉によれば」)

「人間の基準に従えば」という意味と思われる。

→コリントの教会がその成立時において、政治的・社会的に影響力を持った大物や上層階級の人たちがほとんどいなかったことがここから分かる。たしかに使徒言行録 18：8 には、「会堂長のクリスポ」が「一家をあげて主を信じるようになった」と記されており、知識や社会的影響力、生まれなどの人間の基準からすれば「知恵のある者」、「能力のある者」、「家柄のよい者」などがコリントの教会に皆無であったということはないのだろう。そうした人もいたことはいたようであるが、しかしながらそれは決して多くはなかったのである。

○「ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。」(27～28 節)

→パウロはこのように述べて、コリントの教会が形作られた意味を、神様の選びと関連付けて説明する。コリントにおける福音宣教によって、人の基準に基づく差別が乗り越えられること、人の基準に基づく「無学な者」と「知恵ある者」との関係や、「無力な者」と「力ある者」との関係、「無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者」と「地位のある者」との関係がひっくり返ること、これこそが神様があえて「無学な者」、「無力な者」、「無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者」をこの世からたくさん選び出し、コリントの教会を形作った目的であり、意味なのだと言うのである。

○「それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです。」(29 節)

→そして最終的にパウロは、神様によるコリントの教会の人々の選びの究極的な目的をこのように説明する。

・すでに説明したように、コリントの教会のごたごたの根にあったのは自らを誇るという問題だった。パウロの論敵たちは自らを「霊の人」(＝「御霊に属する人」)として、肉に属していないと誇り、コリントの教会の人々にも影響を与え、色々な基準に基づいて人間的要素により頼み、誇り高ぶる人々を生み出していた。こうした人々は、人間同士の基準から離れて、「神の前」に自らの卑しさを徹底的に知らされ、その誇りを打ち砕かれなければならない。コリントの教会の人々の選び、その神様の招きの御業を前に、人間的な誇りはまったく否定される。

○「神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。」(30 節)

→ここにはパウロの教会論とキリスト論が明示されている。すなわち、パウロにとって教会とは神様によってキリスト・イエスに結ばれた者の集まりに他ならない(cf. キリストのからだ、ぶどうの木)。このようにキリストに結ばれたキリスト者は、新しい命に生きる存在となっている。キリストと一体となり、キリストと一体とされた者同士の交わりの中に生かされている。これが教会であり、「主イエス・キリストとの交わりに招き入れられた」(9 節)者の立場である。そして、教会の存在の起源はただ「神によって」いる。

・さらにパウロのキリスト論について言えば、「キリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられた」存在に他ならない。「神の知恵」とは、キリスト・イエスによって人にもたらされた神様の救いの計画のことを指している。私たちはこの「神の知恵」を通して父なる神を知ることができる。

・さらにパウロは、キリストはいかにして「神の知恵」となられたかを、「義と聖と贖い」というキリストの御業全体を表す言葉で説明している。

「義」→キリストの十字架のゆえに義なる者として神様に受け入れられること

「聖」→無償で義とされた者がその立場にふさわしく現に生き続けること。これは聖霊

の働きによるキリストとの交わりの中で可能とされる神様の恵みの御業に他ならない。

「贖い」→キリストによって既に代価が支払われているゆえに約束されている最後の日における完全な解放のこと。

・このようにパウロは、「神の知恵」であるキリストの御業を、教会の過去、現在、未来にわたる壮大な神様の恵みの広がりとして描いている。

・このような教会論とキリスト論を理解すれば、コリントの教会の人々は自らを小賢しく誇るということから解放されるとパウロは考えた。パウロにとって人々の誇り、高慢の問題は、単に心理的な問題であっただけでなく、神学的なものであったことが分かる。

○「『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりになるためです。」(31 節)

・「誇る者は主を誇れ」→エレミヤ 9：23〜24 からの自由な引用

・コリント教会の招きの現実を見つめ、教会論とキリスト論を正しく理解する時、主なる神のみがすべての賛美を受けるべき御方であることが深く実感できるはずである。小賢しく自らを誇るという行いから離れて、そのようにしなさいとパウロはコリント教会の人々に勧めて今回の聖書個所の議論を締め括る。

【今回の聖書個所から思うこと】

○私たちもまた学歴や社会的地位など、人間の業績を誇りにして生きる社会の風潮の中を生きてはいないだろうか。しかし、神様の招きはそんなものによるのではない。ダビデを選ぶ時、「わたしは……人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」と仰られた主の御言葉を思い出したい。人間の価値は業績によるのではない。神様の愛と福音とを宣べ伝えていくのに、そうしたものは必要ではない。人間の業績とか、生産性とか、そうしたものによって隔てられるあらゆる差別を越えて、皆がキリスト者として生き、神様の愛と福音とを宣べ伝えるべく遣わされていく場、それが教会であるということをいつも覚えておきたい。